二葉亭四迷『小説総論』試論

――二葉亭の創定した「意」と「形」――

小林和子

はじめに

日本の近代文学におけるリアリズム理論をより一層深い批判精神をもって成立させたのは、二葉亭の『小説総論』であることは言うまでもない。そこで、『小説総論』の成立にあたって、二葉亭の思想の中心となる価値基準―「意」と「形」という二つの基本概念が、どの様な世界観、文学観を背景に形成されたかについて、具体的に考察してみようと思う。

二葉亭の場合は、『小説総論』成立に与った思想的材源を多くロシア語文献に依存していたと考えられるが、二葉亭が読んでいたと思われるロシア語文献で、現在わかっている理論的書物として、『ベリンスキー著作集』(全十二冊)、ア・フィローノフ編『ロシア語アンソロジー』(散文篇)、ゲ・スツルーヴェ『初等論理学』をあげることができる。そこで、「意」と「形」について考えてみると、『小説総論』の中に記されている『ベリンスキー著作集』を中心に検討していく必要が出てくる。これを主として、ベリンスキーの小説論と、二葉亭の小説論とを対照させながら、二葉亭が、「意」と「形」をどの様な根拠により設定し、どの様な意図により展開、発展させていったのかという問題を中心に考えていきたいと思う。

I

『小説総論』の冒頭で、

凡ソ形(フォーム)あれば茲に意(アイデア)あり。意は形に依つて見はれ、形は意に依つて存す。物の生存の上よりいはば、意あつての形、形あつての意なれば、孰を重とし、孰を軽ともしがたからん。

と述べて、存在全体を意と「形」という二つの基本概念として集約し、「内在する本質」と「表面に現われる現象」との二元論を設定している。次に、

されど其持前の上よりいはば、意こそ大切なれ。意は内に在ればこそ外に形はれもするなれば、形なくとも尚在りなん。されど形は意なくして片時も存すべきものにあらず。意は己の為

に存するものゆゑ、厳敷いはゞ形の意にあらで、意の形をいふべきなり

として、二元的同一条件にあった「意」と「形」を、持前という中間概念によって、それぞれを評価し、「意」が存在の根源であるとしている。

そこでまず考えられることは、二元的同一条件にあった「意」と「形」が、二葉亭のどの様な思惟によって、区別をされ、絶対的根本「意」となったかである。これについては『小説総論』の冒頭部の前提より、二葉亭の思想について探ってみよう。

『小説総論』が、実証的な論理体系による弁証法で論をすすめ、具体的な位置づけと、文学というもののあり方を的確に表現した日本におけるリアリズム小説の原理であり、また先駆的に提示した価値ある論であることは事実である。ところで、そのリアリズム小説の原理の根本となる冒頭部の『意』と『形』とは、一体何を基準にして考えられたのであろうか。現在一般的に考えられていることは、『小説総論』の第一段と考えられる部分に引用されているベリンスキーの論で、形而上における目に見えない本質を「イデー(идея)」形而下における現実の諸現象を「フォルム(форма)」とする説からの借用であるとされている。もっと厳密にいえば、『ベリンスキー著作集』の第十二巻に所収されている『芸術のイデー』(二葉亭の翻訳によると『美術の本義』であるが)の中で述べられている様に、

思惟は起点、原点は神の絶対的イデーである。思惟の運動とは、このイデーが最高の(先駆的)論理学つまり形而上学の諸法則に依って自分自身から発展することである。(傍点小林以下同じ。)

自然の全現象は、普遍的なものの部分的特殊的顕現に他ならない。普遍的なものはイデーである。イデーとは何か。哲学的定義によれば、イデーとは、その形式かそれにとって外的なものにものかではなく、それ自身の発展、その固有な内容の形式であるところの具体的概念である。(注1)

からの引用であるとされている。また、北岡誠司氏は、「『小説総論』材源考—二葉亭とベリンスキー—」で、スツルーヴェの『初等論理学』などからの、現実の事象における内と外の二面性をとらえる思想を吸収していると述べている。

ところで、二葉亭は実際、ベリンスキー、スツルーヴェをはじめとするロシア文学者の論ばかりをうのみにして、彼等からの影響だけを二葉亭の思想に反映させていたのであろうか。そして、二葉亭の「意」と「形」の定義づけの大半は、ロシア的思想にあるのだろうか。もちろん、二葉亭はベリンスキーに深く傾倒していたことはたしかである。明治二三年(一八九〇)七月九日附けの内田貢(魯庵)宛の書簡の中でも、魯庵の二葉亭へのベリンスキーに対する質問の答として、

むつかしき御尋ね御答に當惑仕侯ベリンスキーを愛讀したるは四、五年前の事ゆゑ、今は大低うろおぼえと相成侯

と書いている。これによってもわかる様に、明治十九年頃に二葉亭がベリンスキーを愛読していたことは事実であろう。実際、『ベリンスキー著作集』で使用されている「イデア(идея)」と「フォルム(форма)」を英訳の「アイディア」と「フォーム」に、そして「意」と「形」という日本語に訳して、『小論総論』で使っている。

だが一方、二葉亭が同様に敬愛していたと思われる魏叔子の論に注目してみたいと思う。これは、二葉亭『の落葉のはきよせ　二籠め』の中に所収してある「文章論」で書いている様に、

魏叔子曰く文章之妙は積理、錬識に在り　之を解する者の説に曰く理とは心の本體なり　之を山に譬ふ始終儼として變せず識とは心の用を完ふする所以のものなり又才能を切劇する所以のものなり　之を水に譬ふ　始終物に隨ひて變化し會つて定形あることなし　余曰く近し

である。ここで二葉亭が引用しているごとく魏叔子は「文章之妙在于積理而錬識」（文章の妙は積理、錬識に在り。）と唱えている。魏叔子も「理」と「識」という二元論をもって文章を考えている。そして、二葉亭は魏叔子の考えについて「讀魏叔子文」の中で、次のように言っている。

然則　叔子之文之氣力如此其盛者　豈非由其大過于一人者乎哉、豫嘗讀看之所謂大家之文類　皆所謂金玉其表　敗絮其中　雖一讀過　則有如春花絢爛者　一轉思　則情味索然　如髑髏之横野草間者　靡有足觀者　嗚呼是豈　非由隆其辭而不顧其意乎哉　豫較讀魏叔子之文與當世諸賢之文　始知　文章以理氣爲尚　如夫字句彫琢　蓋不足論

それならそこで、叔子の詩文の気力は、盛者の様である。どうして叔子に大きなあやまちがあるだろうか。いやない。私は大家の詩文の類を読んでみた。皆、美しい表現をした文章を書く。その文章の表面の美しさがやぶれたとして読みとってみると、その時、春の花のあやなって美しい文章の様が一転して、趣はつきて、野原の草の間に横たわっている髑髏の様に悲惨なものになってしまう。ああ、これは一体どういうわけか。その言葉を尊んだためだけでなく、意（内容）に十分注意を払わなかったからであろう。私は魏叔子の文章を今日の多くの賢者の文章と比較して読んでみて始めて知った。文章において、理気（呼吸を整える）を為すことは文章をみがくことではあるが、おおかた論にはならないものであると。（訳小林）

魏叔子は「文章之妙在于積理錬識」と言って、「意」と「形」という語は使ってはいないが、不動の巌の様な「理」―内在する本質と考えても言いすぎではない―と、浮動であって、水の様に絶えず物に随って変化し会う「識」―様々に変化する現実の諸現象と考える―は、いわゆる「意」であり形なのである。だから二葉亭は、この論に対して賛同しているのである。

魏叔子の論は、あくまでも文章論であって世界観ではないかもしれないが、この論も二葉亭の『小説総論』で述べられている「意」と「形」の根拠の一つになっていることは、疑えない事実である。

ところで、二葉亭は「文章論」で「余曰く近し」と述べている。これはどういうことなのだろうか。魏叔子の考える二元論（「理」と「識」にたとえられる）に、共感していることは先に述べたが、「理」と「識」という言葉では、二葉亭の論のすべてを表現することができなかったのだろう。それは、「理」と「識」という言葉が文章論、あるいは、その語自体の意味から言うと、「理」―すじみち、道理、きめ、おさめるであり、「誠」―しる、さとる、みわける、しるす、おぼえるなどで、ある程度語彙が限定されている。これからすると、二葉亭は自分の考えを「理」と「識」で表現するよりは、「意」と「形」というベリンスキーの世界観を背景にした言

葉で表現した方がより適当であったのだろう。だが、論としては魏叔子にも影響を受けたので、「余曰く近し」となったのであろう。こう考えると、二葉亭の考える「意」と「形」はあくまでも、ベリンスキーの「イデア（идея）」と「フォルム（форма）」に依存していたと考えられる。

II

だが、実際のところ、二葉亭がベリンスキーの「意（идея）」、「形（форма）」についてすべて賞賛していたわけではない。それは、二葉亭の翻訳した『美術の本義』と、『ベリンスキー著作集』第十二巻所収の『芸術のイデー』の訳出の相違を見れば一見してわかることである。ベリンスキーは、『芸術のイデー』の中で、

Точка отправления, исходный пункт мышления есть божественая абсолютная идея; Движение Мышления состоит В развитии этой идеи из самой себя, но законам высшей (трансцендентальной) лорики или метафизики;(注2)

思惟の起点、原点は、神の絶対的イデーである。思惟の運動とは、このイデーが最高の（先駆的）論理学つまり形而上学の諸法則に依って自分自身から発展することである。

としているのに対して、二葉亭は

意匠の由て生ずる所のものは真理なり。最上（含有）論理法若くは形而上学に拠って、自ら真理を生ずるは意匠の事なり。

としている。「神の絶対的イデー」（божественая абсолютная идея）を「真理」の一言に表現しているのである。何故、「神の絶対的イデー」を「真理」と改訳したのだろうか。また『小説総論』の中でも、「されば意の未だ唱歌に見はれぬ前には、宇宙間の森羅万象の中にあるといって、「意」を普遍的なものと考えている。同様に、『美術の本義』では、「意」を「真理」という意味の限定された曖昧な言葉で表わしている。これに対してベリンスキーの「イデア（идея）」は「自身の発展、その固有な内容の形式であるところの具体的概念」(注3)なのである。安井亮平氏は、これについて、

これは「意」が「神」に起源することを拒む姿勢が彼の中に厳存していたためであるが、それとともに、彼がベリンスキーの考えの底にあるヘーゲルの「絶対精神」（Absoluter Geist）をじゅうぶん正確には理解していなかったことも関係していると思われる。(注4)

と述べている。実際、二葉亭は逍遙が言っている様に

君も其頃性格批評の方面は例のグレーという教授直傳の蘊蓄があつたのだが、美學という方面は、專らベリンスキーの論集が種で、それは全く獨學的に讀んでゐたので『ヘーゲルの哲學が分らんからよく分らんがと』言つて（君は決して知つたか振りをするということが無かつた）ちぎらちぎれに話したもので、要領を得なんだ點も多かつた。(注5)

といい、その後再び二葉亭とベリンスキーとのことをふれた時も

獨學式であった爲か最初はベリンスキーと發音してをり、『ヘーゲルが頭にないから、どうも隔靴搔痒で』と言ひつゝ、彼れの美學の一班を斷片的に話して聞かせてくれた。(注6)

と記している。この様に、ヘーゲルの「絶対精神」を二葉亭が、十分正確に理解していなかったことは事実であろうが、それ以上に

「意」が「神」に起源するということを拒む力の方が強かったではないかと推測される。それは、二葉亭にとっての完全なるキリスト教的倫理観の排除なのである。まずそれには『小説総論』の中で引用されている「之を某學士の言葉を假りていはば」における某学士の論をここで掲げておかなければならない。この某学士とは、『文学論』（明治十八年八月丸善商社刊）を執筆した有賀長雄という当時法学者であった人物である。二葉亭はキリスト教的倫理観の排除においては、有賀の『文学論』の影響を強く受けたのである。なぜならば、有賀は、その『文学論』の（第三節）「綱紀を理學に因て正すことの不當なる事」の中で、

しかるに、このキリスト教は白人の生活白人の人生から生れたもので、このままでは世界的のものとなっていない。白人は遲民意識が極めて強いものであるから（殊にその頃の白人が然り）、キリスト教も白人以外にも応用されるべき綱紀という点になると弱いところがある（中略）日本人などにはすぐ通用せず、種々の点で差障りがある（中略）キリスト教、仏教は往々現実を否定するもの、現実を離れ、またこわすものである。(注7)

とキリスト教の幣害について述べている。また、（第四節）「西洋の倫理、政理、法理、萬古不易なる能ざる事」の中で、西洋学問の本質を述べ、西洋の中におけるキリスト教に対して、

キリスト教徒となっても、現実規正の力は公平に行なわれない。大よそ白人中心のことである。(注8)

と論じている。二葉亭は『小説総論』で有賀の論文を引用している以上、この『文学論』を一応熟読しているだろう。そして、このキリスト教に対する批判に対して一応同意したのであろう。

ところで、キリスト教に対する二葉亭の考えとしてもう一つの事実がある。それは『ベリンスキー著作集』に見られる二葉亭自身の書き込みである。『ベリンスキー著作集』第三巻に所収の『知恵の悲しみ』の中の、古い時代を一新して人類の、そして宗教の、新しい時代ローマン主義が訪ずれたという部分で

Нопрамымъ и непосрдственнынмъ источикомъ всей этой романтиеской жизни было христианство (注9)

というキリスト教（Христианство）」という箇所にアンダーラインが引いてあった。（このアンダーラインは赤エンピツである。二葉亭の直筆か）このことから考えても、二葉亭がキリスト教に対してある種の（ここでは白人の為に作られたとか、白人中心であるとか）問題意識を二葉亭なりにもっていたことは確かである。二葉亭は『予が半生の懺悔』の中で、

私は帝國主義の感化をうけたと同時に、儒教の感化も餘程蒙った。だから一方に於ては、孔子の實踐躬行といふ思想がなかなか深く頭に入つてゐる。（中略）つまり東洋の儒教的感化と、露文學やら西洋哲學やらの感化とが結合つて、それに社會主義の影響もあつて、

この様に述べている。二葉亭は、ロシア文学及び西洋思想だけが、二葉亭の根底をささえている理念ではなかったのである。だから、二葉亭自身が『小説総論』あるいは、美術の本義の中で「意」の定義に対して「神の絶対的イデー」を考えることを拒んだのは、こうした考えからであろう。そして、あえてキリスト教的倫理観を排除して、西洋一辺倒ではない西洋と東洋の学問の利点を統合調和した自己の小説論、文学論を書こうとしたのであろう。二葉亭の考

える「意」と「形」は名称自体はベリンスキーの借用であるが、実質的根拠としては、二葉亭自身がもっている文学に対する考え方なのである。

Ⅲ

二葉亭は『小説総論』の中で「意」を〈芸術論〉において、

宇宙間の森羅萬象の中にあるには相違なけれど、或は偶然の形に妨げられ、或は他の意と混淆しありて、容意に解るものにあらず。

と言い、また〈小説論〉においては

實相界にある諸現象には自然の意なきにあらねど、夫の偶然の形に蔽れて判然とは解らぬものなり。

と述べている。この様に二葉亭は、それぞれにおいて「意」に対する定義づけをしているが、その「意」に対する概念を裏づけるいくつかの参考文献があったことはまちがいない。そこで、二葉亭の思想を形成する際に参考にしたと思われるもの、まず『ベリンスキー著作集』第三巻『知恵の悲しみ』の一節を上げてみよう。（二葉亭の所蔵していた本のこの部分には明らかに二葉亭のものと思われる書き込みがある）

中世の豊かな生命を作ったものの中に、ロマンチズムの要素があった。この時代は精神が目覚め回復する時代だった。精神は、自らを認識するためには自然から自らを分離しなければならない。自然は他ならぬ精神（古い意味で）の一面ではあっても、いはば、精神の見えざる命を自らのうちに吸収することで、人間の眼を精神の秘められた本質からフォルムの魅力へとそらしてしまい、精神を曖昧にしてしまうからである。精神は、表にあらわれたフォルムにまどわされず、現実にあらわれる必要があった。そして精神は自由の偉大さの中に再び自己を回復し、自分自身の敵であり、悪魔的な自然を否定した。(注10)

つまり、二葉亭はここに書いてある「精神（Духа）」と「自然（природы）」の相互関係を二葉亭の考える「意」と「形」の概念に適合させている。ベリンスキーの言う「自然」とは精神の見えない命（本質）を自然の中に吸収することで、人間の眼を精神の秘られた本質からフォルムの魅力へとそらしてしまい、精神を曖昧にするものである。自然はフォルムではなく、フォルムの魅力へと人間の眼をそらすものである。ところで、ベリンスキーの〈Форма〉はあくまでも現実にあらわれる形、形態なのである。二葉亭は語彙として形である〈Форма〉を二葉亭の指向する形を述べる際の単なる補助的な言葉として用いたのである。それは〈идея〉について考えた時により明白になるのである。つまり、原文を読んだ場合、本の欄外に英語で〈idea & form〉という書き込みをしておきながらも、本文中には〈идея〉という語は一語もみつからないということである。これでもわかる様に、二葉亭の「意」と「形」は、単なるベリンスキーの〈идея〉と〈Форма〉の借用ではなく、「意」は「精神（Духа）」であり、「形」は「自然（природы）」なのである。

それでは次に、以上の世界観を踏まえながら、『小説総論』の中心主題であるリアリズム小説論、いわゆる「摸寫といへることは實相を假りて虚相を寫し出すといふことなり」について、二葉亭のリアリズムの神髄を探ってみようと思う。

真実を模写すること、写し出すことは、実際のあり様を描くことによってその奥に在る本来の姿を写し出すことである。これは「物」の本質は「意」であり、個々の現象はその「意」が状況に応じて特殊な「形」であらわれることだとする二葉亭の世界観から考えると、「実相」というのは「諸現象」―「形」であり、「虚相」というのは「自然の意」―「意」であることになる。従って、小説において「虚相」が「実相」に優先しなければならない理由も明らかである。こう考えていくと、二葉亭の世界観の中心である「意」と「形」を「虚相」と「実相」にあてはめてリアリズム小説の定義づけをしていることは明白である。しかし、「実相」と「虚相」の語彙を使った起因が不明である。というのは、辞書に「実相」という語は載っていても、「虚相」という語がみあたらないことである。「虚相」とは二葉亭が作り出した造語なのであろうか、ではその意図は何であろうか。

ところで、虚実の概念には、大別して二つの系統がある。まず一つは、虚―うそ、実―まこと、という概念、もう一つは、虚―から（無形の存在）、実―み（有形の存在）という本来的な概念である。虚実を前者の概念で考えると、二葉亭のリアリズムとは全く異なる意味になってしまう。では後者の「有形」「無形」の概念であると考えると、「実相」は「有形」のもので現実の「諸現象」である。また「虚相」は目にみえない「内在する本質」であるから、「無形」となるのであろう。そうすると、「有形」「無形」の概念がやはり適当なのであろう。しかし、現実に当時の風潮としては、十川信介氏が述べている様な状態であった。

近世合理主義の洗礼以後、目に見えるものは事実として尊重され、目に見えぬものは嘘として排斥されつつあった。（中略）この傾向に拍車をかけたのは、幕末維持を通じて時代を支配した実学の流行である。「今斯る益なき学問（和歌詩文）は先ず次にし、事ら勤むべきは人間普通日用に近き実学なり」（「学問のすすめ」）という福沢の意見に代表されるように、明治の「実」は実用に益する実学であり、実学とは「種々ノ才能アル諸人『エッキスペリメンタル、インクワイリース』（試験考究）トイヘル実務ニツイテタシカニ之ヲ経験シ親試シテ始メテソノ然ルヲ知ル学問」（注11）（中村正直「西洋一斑」）に他ならなかった。実用とは事実である。

以上の様に「実」は実用であり、いわゆる実用主義なのである。明治初頭においては、福沢諭吉が言う様に、「実」とはすぐ役立つ益のあるものであり、「虚」とはその反対に益のないむなしいものであった。だが、これは当時の概念がこの範疇にあっただけのことですべてだったわけではない。それは、明治の新文学以前に、その正統にたっていた漢詩の虚実論である。その代表的なものとして、唐詩の注釈書で最も広く流布していた『三躰詩抄』を挙げてみよう。ここでは虚実を

虚語トアルハ。ツ子ニ云フ虚語ノ。ソラコトバ。ナイゾ。イカニ眞實ノ語ヲ云タリ圧。思情ノコトバヲ。皆ナ虚ト云ゾ。カタチナキ。ホドニゾ。（中略）虚トハ心ヲイヒ。實トハ景物ヲイフ。（中略）風華雪月等ノ。景物ハ。形アル者ソ。サルホトニ實ト云ソ。心ハ虚靈トテ形ナキモノソ。サルホドニ。意ニ所レ思虚トイフソ。（注12）

と言っている。漢詩の虚実は、以上の様に心と景物とである。と

ころで、漢文を愛好していた逍遙や二葉亭は、漢文における虚実論から多少とも影響を受けていたことは事実であろう。逍遙は『小説神髄』下巻の〈主人公設置〉の中で、主人公を造作する方法として、

現實派は人間の形を畫く畫工の如く、理想派は夫人を畫く畫工のごとし。（中略）蓋し虛實の相違のしからしむるものなりかし。(注13)

と、漢詩の虚実論を引用している。二葉亭もまた、パアブロフの翻訳『學術と美術との差別』で

學術は實在の物を變じて虛靈の物となし、美術は虛靈の物を變じて實在の物となす。

という様に漢文の虚実論でこれを訳している。二葉亭はパアブロフの思想を「虚」は心であり抽象性・論理性・観念性・精神性の意味を持っており、「実」は景物であり具象性・具体性・実体性の意味を持っていると解釈している。これから推測できる様に、二葉亭の虚実論は漢詩の虚実論に基づいていることがわかる。つまり、「虚相」とは心であり「内なる本質」なのである。また「実相」は景物であり、「現実にあらわれる諸現象」なのである。

Ⅳ

次に、ベリンスキーの「精神（духа）」と「自然（природы）」の相互関係を「意」と「形」にあてはめてみると、一つの仮説をたてることができる。それは、『三躰詩抄』の虚実論との対照である。ベリンスキーの「精神」とはいわゆる「心」である。『三躰詩抄』の「虚」は「心」である。従って、「精神」と「虚」は「心」という同じ背景をもっているという意味において考えるとイコールである。つまり、漢詩の虚実論の「心」と「景物」の相互関係が、この「精神」と「自然」の相互関係と一致する要素をもっているのである。とすると、二葉亭の世界観から小説論への発展は、この考え方に基づくと容易に説明することができる。

ベリンスキーの述べる「精神（духа）」は自然と分離して自己を認識し、自己を回復するものなのである。表にあらわれたフォルムに惑わされる自己を回復するものなのである。すると、「実相」と「虚相」の相互関係にすぐあてはめられる。それは、「虚相」とは実相界の諸現象の偶然の形のなかにおおわれて、はっきりとはわからないものであるが、様々な表現方法つまり、「言葉の言い廻し」、「脚色の模様」などによって明白に写し出されなければならないのである。「自然（природы）」の奥にひそむ見えざる命であってはならないのである。二葉亭の考える模写とは、その「精神」を回復させることであり、「虚相」を描き出すことなのである。

ところで、二葉亭は『小説総論』の中ではいつも二つの対立概念、例えば「意」と「形」「自然」と「偶然」、「実相」と「虚相」、のみに重点をおき、それらを結ぶ「持前」とか「種類」とか「典型」とかの中間概念の説明を曖昧にしていると考えられる点がある。現実の事象の中から「意」を汲み取ることばかりを重視して、「意」を「形」として表わす際の過程の説明が省略されているのである。この問題が後に『浮雲』を執筆する際の大きな問題となってくるのである。そして、『浮雲』中絶のあと、『其面影』『平凡』を執筆するまでに解決しなければならない課題でもあった。ところが、二葉亭は、明治四一年に発表した『予が半生の懺悔』の中で、

「浮雲」にはモデルがあったかといふのか？　それは無いぢやないが、モデルは参考で引寫しにはせん。（中略）自分の預て知っている者とかの中で、稍々自分の有っている抽象的觀念に脈の通ふ人があるものだ。するとその人を先ず土臺にしてタイプに仕上げる。勿論、その人の個性（インディビュアル）はあるが、それを捨てゝ了つて、その人を純化してタイプにして行くと、タイプはノーションぢやなくて、具體的のものだから、それ、最初の目的が達せられるという譯だ。

と言っている。この文章ですでに中間概念の必要性を十分認織している。そうすると、実験小説的色彩を多分にもっている『浮雲』を中絶してから、『平凡』を再び書き始めるまでの間に、曖昧になっていた中間概念に対する問題が解決したのだろうか。だが、『浮雲』の主人公、内海文三も本田昇もお勢も、二葉亭が述べる様な、あるモデルがあるのではなく「抽象的觀念に脈の通ふ人」を土台にしてタイプに仕上げた人々なのである。

ところで、二葉亭は『知恵の悲しみ』の中でベリンスキーが述べている「自然（природы）」をどう考えていたかである。推測できることとしては、〈форма〉を形態と考え、〈природы〉を状態と考えて論を展開したのだろうということである。だから、二葉亭の「形」は状態に属するものである。そして、二葉亭は「形」を単一の概念ではなくて、流動的で多様なものと考えたのだろう。そうすると、中間概念をはっきり明示することなく「偶然の形に蔽れて」として「偶然」という、たまたま現象として現われた様々な状態として表現したのである。つまり、ベリンスキーの〈природы〉と対象させたのである。こうすると、二葉亭の意図が単に中間概念の欠如として批判することなしに理解できるのである。

もっとこれを具体的にするために『ベリンスキー著作集』第三巻『知恵の悲しみ』の中で述べられている文章を例に上げてみることにする。それは、詩とは本来どういうものであるかについて説明がしてある部分だが、次の文章には、二葉亭の自筆とみられるアンダーラインが記してあった。

詩の対象は現実である、いいかえると現象のうちにある真理である。（中略）理想とは個別的な現象になるや再び以前の普遍性へと回帰するために、自らの普遍性を一時否定している普遍的絶対的イデーのことである。（中略）『現実の理想化』とは、現実から何らかの偶然的な現象をそのまま引写しにすることなく、自らが象徴している普遍的なイデーのおかげで典型的であるような典型的形象を創造することによって、個別的で有限な現象のうちに普遍的なもの無限なものを表現することである。

また別の部分で

詩は直観という形式によってとらえられた真理である。その作品は形を得たイデーである。したがって、詩は哲学と同じである、思考と同じである。なぜなら詩は同じ内容―絶対的真理をもつものだから。ただしかし―哲学の様に）イデーがその内部から弁証法的に展開するという形式においてではなく、イデーが現象のうちに直接あらわれるという形式において、絶対的真理を所有するのではあるが。つまり、詩人は形象によって考えるのである。真理を証明するのではなく、表示するのである。

ここでは、ベリンスキーの考える写実の意味、写実の方法、写実の具体的作法及び、ベリンスキーの芸術観を知ることができる。そこで考えられることが、『芸術の理想化』《Идеализировать Действительность》である。つまり、これが二葉亭が考える「意」と「形」を代表したリアリズムの基礎となる考え方なのである。この『理想の現実化』の部分を考えることによって、二葉亭の考えるリアリズムを最も具体的なものとして認識することができる。

V

以上の文献でもわかる様に、二葉亭の「實相を假りて虚相を寫す」リアリズム小説論は、ベリンスキーの「現象」のうちに「本質」を直接的に認識するという思想と根本的に同じであることがわかるのである。つまり、漢詩の虚実論から派生したと思われる「虚相」と「実相」がベリンスキーの世界を十分に表現したということになるのである。だが、二葉亭はベリンスキーのごとく、「本質」を様々なるイデー（例えば、動的な神のイデーとか、絶対的イデーとか）として表現するのではなく、魏叔子の言う「文章之妙在于積理而鍊織」の「理」の如く不動な一つの普遍的な「意」をキリスト教的倫理観の排除によって定義づけたのである。だが、この定義づけによって二葉亭はベリンスキーの表現したヘーゲル哲学の観念論だけを享受して、その汎神論を排除してしまった。世間は唯一絶対者の自己展開であるという「イデー」の展開、「意」の展開を思想の中に導入しなかったのである。このことが、二葉亭のリアリズム小説論と、実験作『浮雲』におけるリアリズムのギャップを引き起こす一つの起因をなしたことは事実である。しかし、逍遙が実学優先の社会思想、観懲主義が主流をなしていた文学界に、写実主義という近代を背負って、小説の本来あるべき姿を提起し、挑戦した後に、それを理論づけて確立し方向づけをした二葉亭の業績は偉大なものである。もちろん、汎神論的「意」の展開の認識がないということは、必然的にその論の適用範囲を限定して決めてしまうことになるだろう。しかし、二葉亭は漢詩の虚実論に依拠した写実論を西洋の文学思想に補綴させながら、単に、小説を書く時、あるいは書く際の方法及び認識を説くだけではなく、既成にある様々な小説を批評する際の根本的認論をも説くまでにその文学論を高めたのである。リアリズム論による模写の重要性を説くだけでなく、しっかりした批判的態度が読者及び批評家にそなわっていれば、従来の日本の小説がいかに価値のないものであり、改革し、改良する必要があることを認識することができる。その上、西洋の進んだ文学というものを十分理解することができるのであると、当時の読者及び民衆に訴えているのである。こうまで言うと言いすぎかもしれないが、事実二葉亭という人は、外国語学校に入学する前から「維新の志工肌ともいふべき傾向が、頭を擡げ出して来て、即ち、慷慨憂國といふやうな輿論と、私のそんな思想とがぶつかり合つて、」と『予が半生の懺悔』の中で言っている様に、文学に対しても同様の気持、いわゆる日本の文学を良い方向に発展させて行くために、民衆にそれらの欠点を認識してもらう必要があった。そして、二葉亭はそのことを一つの重大な意義と感じていた。それが『小説総論』執筆後、『浮雲』を執筆するにあたって二葉亭が言文一致を試みた理由の一つでもあろう。ところで、二葉亭は『余が言文一致の由來』の中で「何か一つ書いて見たいと思つたが、元來の文章下手で皆目方角が

分らぬ。（中略）これが自分の言文一致を書き初めた抑もである。」と述べているように、起因は二葉亭の文章下手によるものだったかもしれないが、明治二一年七月二四日に「報知新聞」に載った思軒居士（森田思軒）の『日本文章の将来』を読んだ感想として『くち葉集　ひとかごめ』の中で『日本文章の將來に關する私見』は

言語は人の意思の反映にしてまづ無聲の言語有りて然る後有聲の言語有るを得べく、まづ無形の文字有りて然る後有形の文字有るを得べし、然らば則ち言語と文章とは意思の聲に形はれ形に形はれたるものというも固より不可なかる可き歟。

と言っている。つまり、言語は人の意思の反映である、として人の意思を正しく現わすためには意思の声にあらわされた文章を書くことである。それができないわけはないというのである。自分の意思を正しく伝えるためには、自分の意思をはっきり示すことのできる文章を書く必要があるのである。そうなると擬古文体は、国民語の資格をもたない漢語を使って文章とするのであるから、本質を直接文章にあらわすことはできないことになる。つまり、従来の死んだ文章では変動していく現象の実態をとらえることができないのである。本質を直接文章の中にあらわすことで、変動する実態をとらえるためには、やはり言文一致の文章、西洋で使われている様ないわゆる Writter language でなければならないのである。

この様に、単に、二葉亭のリアリズム論は二葉亭の哲学である世界観と文学思想である小説論だけに依存するのではなく、評論、文章、その他当時の社会の中で忘れられていた、つまり、実学一辺倒で目に見えたもの、形にあらわれたもの、結果として出たものだけを重視していた社会に現象のみに惑わされず、その本質、内にひそむ真理を見極めることがあらゆる物事において重要なことであるということを認識させようとしている。

そのことを二葉亭は明治二二年六月二四日の日記の中で明確にしている。

一枝の筆を執りて、國民の氣質、風俗、志向を寫して、國家の大勢を描き、または人間の生況を形容して學者も道德家も眼のとゞかぬ所に於て眞理を探り出し、以て自ら安心を求め、かねて衆人の世渡の助ともならば、豈可ならすや。されば小説は瑣事にあらず

この信念は二葉亭の文学の理念であるリアリズム、いわゆる写実主義につながっているのである。

〈注〉

1 『近代文学大系・二葉亭四迷集』4（昭和四六年三月十日、初版、角川書店刊）所収の安井亮平『補注』、四七〇頁。

2 『ベリンスキー著作集』（全十二巻、一八七二～七六、H・ケッチェル編ゾルダチェンコシチェプキン刊）第十二巻所収『芸術のイデー』

3 注2に同じ。原文 но форма его развития, его же собственного содержания

4 注1に同じ。

5 『逍遥選集』第十二巻『二葉亭四迷（其2）』（昭和二年七月、初版、角川書店刊）、頁五一二より収録。

6 『柿の蔕』（昭和八年七月中央公論社刊）所収『二葉亭の事』、五一頁。

7 柳田泉『明治初期の文学思想』上巻（昭和四〇年三月十日、初版、春秋社刊）所収の『有賀長雄の『文学論』』、四七〇頁。

8 注7に同じ。但し、四七一頁。
9 注2に同じ。但し、第三巻所収の『知恵の悲しみ』、三三五頁。
10 注9に同じ。但し、三三七頁。
11 十川信介『二葉亭四迷論』（昭和四六年十一月二五日、初版、筑摩書房刊）所収『「実相」と「虚相」―『小説総論』について―』、一五五頁。
12 『三躰詩抄』（元和八年）素隠注、第一巻「実接」の説明文より引用。
13 注5に同じ。但し、『逍遥選集』別巻『小説神髄』、一五一頁。

〈附記〉

1 本論文中の引用文は『二葉亭四迷全集』―全十二巻―（昭和三十九年九月二十六日～昭和四十年五月二十六日、岩波書店刊）に依りました。

2 本論文の作成にあたって、『ベリンスキー著作集』の閲覧に関して、早稲田大学図書館のお世話になりました。
3 『ベリンスキー著作集』の日本訳に関して、本学英文科の飯島周先生にご指導いただきました。